座談会

木質材料需要拡大の飛躍の年に
—木の家“北国ハウス”をめぐって—

出　席　者
（敬称略・発言順）

秦　貞　彦
〔北海道木材協会専務理事
北海道木質材料需要拡大協議会事務局長〕

中　森　清　治
〔ホームインサル株式会社取締役社長
北海道住宅リホームセンター理事〕

阿　部　勉
〔北海道営林局企画調整部企画課長〕

増　谷　清　二
〔北海道林務部林産課企画係長〕

宮　島　寛
〔北海道大学農学部教授〕

一　宮　忠　雄
〔北国の住まい相談所所長〕

司会　盛　功
〔北海道立林産試験場副場長〕

記録　伊　藤　勝　彦
〔北海道立林産試験場特別研究員〕

木造住宅の建設を推進して，木材の需要拡大を図る目的で，道産材を使った木の家〝北国ハウス〟が，60年８月から一般公開されている。

この「木の家・モデル住宅展示事業」に関係された方に，文字通り産・学・官・民の協力による事業の経緯について，いろいろお話していただいた。

今回は、基本構想に始まって設計上の苦労，いかに単価を押さえるかなどを，続けて次回には，着工から完成までの，いま初めて披露するというような話題を，それぞれお聞きする。

昨年は「国際森林年」多彩なイベントが

司会　昨年は世界中で人類にとって掛け替えのない森や林のことを考える「国際森林年」ということで，我が国でも自分達の周りの森林を知ってもらうための盛り沢山のイベントが開かれました。

当協会の所在地旭川市においても，３カ年の歳月と２億４千万円の工事費をかけた「道立旭川21世紀の森」が５月にオープンしました。

全道的なものとしては，６月に北海道自治会館で「国民の森林を考える北海道シンポジューム」が、７月から９月にかけて「森林の招待状」ということで「森林の集い」，「夏休みこども博・国際森林年コーナー」，「森林フェスティバル」等が野幌森林公園その他で多くの道民が参加して盛大に開催されたのをはじめ，道内各地域でもそれぞれ趣向を凝らした催し物が企画されました。

一方，この数年来木材業界最大の課題である木材需要拡大のための一環として，５月のゴールデンウィークに道立産業共進会場において「ニューウッディフェア――木製品見本市」が開催され，そして８月13日，北海道マイホームセンター札幌会場に建設中であった北国型モデルハウス木の家〝北国ハウス〟が一般公開されたわけです。

昨年を振り返ってみますと，このように実に多彩な各種行事が行われましたが，これに携わった関係者のご苦労は大変なものであったろうと推察いたします。

本日は、ただ今触れました木質材料の需要拡大対策としては画期的である道産材を使った「木の家・モデル住宅展示事業」の中心的役割りを果された皆さん方にお集りをいただき，いろいろお話をお聞きいたしたいと存じますのでよろしくお願いします。

それでは，まず〝北国型モデルハウス〟の建設に取り組むことになった経緯について，北海道木質材料需要拡大協議会の事務局長でもあります道木協の秦専務さんからお願いいたします。

我々業界は大変幸運だった

秦　ご承知のとおり，木材業界は第２次オイルショック後の昭和55年から大変な不況で厳しい環境にあります。原因はいろいろあるでしょうが，その最大のものは住宅着工数の減少，これに伴う木材需要の減退であると我々は理解をしております。そのために道木協では55年以来いろんな事業をやっておりますが，これらの事業のメインとして需要拡大対策に取り組んできたわけです。

秦　さん

具体的に申しますと，57年に全業界が加わった組織を作ろうじゃないかということで「北海道木質材料需要拡大協議会」というものを創設し，57年から３カ年の事業計画を策定してあらゆる事業を展開してきたわけです。この３カ年の主な事業は木材の良さの総合的なＰＲということに重点を置いたもので，ターゲットを主として一般消費者を対象とし，その取り組み方も基本的には科学的なＰＲを主体に行ってきました。

これらの経過を踏まえ，昭和60年から第２弾の新たな３カ年事業計画として，一般消費者には木質材料とか木製品を直接目で見，手で触れて本物の良さを認識していただくための取り組み，もう一つは建築業界とか設計業界の方々に対し住宅における道産の木材の新しい使い方というものを，本物を提供することによって理解していただくことを取り入れたわけです。

その一番大きな手段として，道産材の良さを生かすとともに北国の生活をより快適なものにし得るモデル住宅を建てて，一般の消費者の方々には本物を見て木の良さを知っていただく，建築関連業界の方々には研修の場にも活用していただこうというのがおおよその経緯です。

我々業界として大変幸運だったことは，国有林においても道産の国有林材の需要拡大ということでこの建設費の全額を北海道営林局でご負担いただいたということです。私共の木質材料需要拡大協議会が北海道営林局の委託を受けて建設するよ

うになったわけです。それと同時に，この建物を設計するに当たってのいろいろな運営費，普及のための諸経費については道の補助をいただくことになったことです。

司会　札幌のマイホームセンターに木造の家を建てたらどうだろうということを最初に言い出したのは中森社長さんだとお聞きしていたんですが。

タイミングよく一挙に解決した

中森　実は，マイホームセンターの中で１戸分の場所が空いている，どこか次のハウスメーカーをお誘いしなければ，という話を聞いたのです。

かねがね思っておりましたことは，林産試験場とか寒地建築研究所あるいは北大とか室工大，道工大とかでいろんな研究をしておられる。その成果は論文として発表されているのかもしれないけれど，一般の人々が勉強するために読むんじゃなくて，目で見，触ってみれる研究発表の場が，そういう公的な研究機関の発表の場があってもよいのではないか，そういう場になるものを建ててみてはどうかと考えていたわけです。

それで当時の林務部長千廣さんにお話をしたところ，「それは大変いいことだ，道でももちろん賛意を表し，賛同するけれども，それは道木協の秦さんのところでまとめていただいているから秦さんに会って欲しい」と言われたわけです。

そこで早速秦さんのところへ行きましたら，「実は昨日，国有林の方からそういう話があったばかりだ，お前どこからか聞いてきたのか」ということで誠にタイミングがよかったんですね。

いずれにしても木材需要拡大ということが大きく叫ばれておりながら，いまの建築屋さんはなかなかそこまでそれぞれの業界に思いやりをはせていない。またひとつ建築工法にしても，どっかの建築屋さんがいい家を建てても勉強にいかない。

一方では，ああいうモデルハウスに行ってみても「同業者お断り」という看板がある。建物を見に建築業者の方は来ないで下さい，ということでは余りにも保守的にすぎるなあと常々思っておりました。まあそれほど建築屋さんは勉強の場を同業者に求めることが難しいということでしょうか。

中　森　さん

ですから当然，林産試験場には林産試の研究成果があり，寒地建築研究所には寒研の成果があるにもかかわらずそれを見には行っていない。そういうものを是非家の姿にしてお見せした方がよいのじゃないか。

それで，これは工務店さんの勉強の場にも，そしてもちろんユーザーも見れるという場にもできる，大変有難いなあと思ってお勧めしたわけです。

もう１つは，モデルハウスを建てる場合に，もしこれがある団地とか住宅地に建て，どなたかに入居してもらってそれを何時でもどうぞ見て下さいといっても，そこに生活があれば押入れの中まで開けては見れない。ですから遠慮なく開けて見れるような，それにはああいうマイホームセンターなんかの中に建てていただいた方がよいのではないかと思ったわけです。

そんな経緯がありまして，本当にタイミングがよかった，うまくいったなあと喜んでおります。

秦　我々がモデル住宅を造るという計画は大分前からあったわけですよね。それではいったい建設費をどう調達しようかということと，何処へ建てるかという具体的なことはこれからツメようという段階だった。そういうときにたまたまさっき私が申しましたとおり，国有林から建設費は出していただけるということが決まった。その翌日，またまた偶然にも中森さんからこの話があった。それで建設費のことも，建設地についても一挙に解決ということになったわけです。

司会　ここで阿部企画課長さんから，国有林の需要拡大対策という立場から北国型モデルハウスの建設費を予算化した経過などをお話下さいませんか。

国有林も思い切った発想の転換をやった

阿部　経過に入る前に，先程秦さんからもお話

阿　部　さん

があったように，やはり木材需要の減退が大変顕著に現れているわけです。数字をちょっと拾ってきたのですが，昭和48年度の全国の総需要量は国民1人当たり約1㎥の1億1200万㎥，これが10年後にどうなったかといいますと，9400万㎥で約20％の落ち込みがみられます。総需要の主たるものは製材業ですが，これをみてみますと，48年度は6700万㎥，58年度は4600万㎥ですから3割も落ち込みがみられるわけです。その背景は住宅建設における木材使用量が落ち込んでいることなんです。

住宅着工量をみてみますと，48年には約190万戸，それが10年後には113万7千戸と4割も落ちている。そのうち木造はどうなっているかと調べてみますと，48年には112万戸，58年は59万戸と何んと47％も落ち込んでいるんですね。それから木造住宅建築に占める木材の使用量をみても2割以上は落ちている。

これは全国的な数字ですが，北海道の木材需要量なり，木造着工件数の落ち込みは，全国的レベルからみると若干緩慢な面があるとはいえ，いずれにしましてもこういった構造的な需要低迷のなかに置かれているわけです。

こういうなかで既にご承知だと思いますが，昭和59年度に林野庁では「ジャパンウッドライフの家」という，いわゆる本州における在来の軸組工法によるモデルハウスを建てて公開したわけです。これは単に物を見せているということではなくて，実需者に直結するような仕組みを考えようということです。今回の〝木の家〟もこんなことから仕組まれているわけですが，いわゆる国有林の供給体制をひとつかませながら受注組織も作るという形で，国有林としましてはまれにみる発想の転換をやったということでしょうか。

その流れをくみまして，60年度は北国でモデルハウスをやろうという予算が組まれましたので，「北国ならば北海道が一番北だ，是非北海道で使わせていただきたい」と林野庁にお願いをしたというわけです。

最近，国有林も単に立木を丸太にしてお金をもうけるというようなことではなく，このように積極的に需要拡大対策に取り組んでおります。

司会　続きまして道の林産行政という立場から木材需要拡大対策と合わせて〝木の家〟の取り組みについて，増谷企画係長さんからお話をお願いいたします。

セミハード的な取り組みに視点を変えた

増谷　それぞれお話が出ていますように，木材産業をこのように停滞させている主な原因は，やはり昭和55年の第2次オイルショック以降の木材需要の急激な減退ではないかと思います。そういうことで，道では56年から林務部長名ですけれども，市町村であるとか，町村会あるいは建築士会等の関係機関に木材の需要拡大について要請をするなどの対応をとってきております。さらに本庁や支庁内に木材利用促進協議会というような組織を作り，道が発注する施設等には道産材を使っていただきたいということできております。

そして，昭年57年に北海道の主な木材産業団体を構成員とする「北海道木質材料需要拡大協議会」が設置されてからは，主要な木材の需要拡大に関する対策はすべて協議会と道が一体となって取り組んできているところです。57年からの3年間は主に一般消費者に対するＰＲあるいは大工，工務店への講習会とか，公営住宅の木造プランの作成などソフト面に力を入れてきております。

昭年60年度からは，これまで実施してきたソフト事業の成果として木材に対するイメージアップが図られてきた，あるいは木材に対する好みなり，潜在需要が高まってきた，というようなことなどを踏まえて，秦さんもお話しておりましたが，今度は実際に物を作って消費者に触れさせるとか，大工，工務店に実際に使ってみせて研修の場にしていくとか，どちらかというとセミハード的な取り組みに視点を変えたわけです。

増　谷　さん

そうして，たまたま阿部さんからお話のありました国の北国型モデルハウス事業が私共の考えておりましたハード事業といいますか，セミハード的な事業と非常にマッチしたということで，建設費は国有林が，モデルハウスを使った普及・宣伝活動については木質材料需要拡大協議会が，それに対応する費用の一部を道が負担する，ということで現在に至っているというところです。

司会　〝木の家〟建設構想そして建設地の決定という発端的な経緯はわかりました。そこで，今度は着工までの具体的な進め方についてお聞かせ願いたいと思います。

豪華なメンバー構成による委員会の設置

秦　木質材料需要拡大協議会では，基本的には産・学・官それに民も加わって北海道の生活にふさわしい，また道産材を上手に使った住宅を造るという基本構想を検討する「北国タイプモデルハウス委員会」を発足させたわけです。この委員長には北大工学部の洪先生，委員に，大学からは北大工学部の足達先生，北大農学部の宮島先生，民間からは建築指導センターの四王天理事長，消費者協会の三宅会長，官からは道営林局の企画調整部長，道の住宅都市部，林務部の各技監，札幌市の建築局長，こういう非常に豪華なメンバーによる委員会を設置しまして，59年10月10日に第1回の会合を開いたわけです。

この委員会に私共が提案しましたことは，この住宅の全体構想と設計から着工，完成そして展示に至るおおまかなスケジュール，設計の基本構想，それに具体的な基本設計を作るための「設計専門委員会」の設置の件についても検討をお願いしました。

また，私共からこの専門委員会に示した設計の条件としましては，①札幌のマイホームセンターに建てるので札幌市を中心とした道央の気象条件に合うものであること，②家族構成は夫婦と子供2人の4人を一応想定したものであること，③住宅金融公庫の融資条件に合致する面積ということで130～140㎡前後のものであること，④大事なことなんですが建設の坪単価は40～45万円前後のものであること，などでした。

この専門委員会のキャップは北大工学部の足達先生に引き受けていただき，委員には北大工学部の荒谷先生，室工大の鎌田先生をはじめ寒地建築研究所，林産試験場，建築指導センター，道営林局，道の住宅都市部および林務部，それに北国の住まい相談所の一宮所長にお願いをし，これはもう60年1月の中旬から4回にわたり精力的に協議を重ねていただいたわけです。主な検討事項は設計，スケジュール，それと基本設計が出た後の実施設計者の選定，また，施工監督，管理の問題につきましても協議をいただきました。なお，実施設計者については最終的に北国の住まい相談所の一宮さんにお願いすることになりました。このようなことでこれらの委員の方々には大変なご努力を願ったわけです。

この後，モデルハウスのＰＲ事業とこの木造住宅の生産受注体制の組織化と在り方なども検討する「普及専門委員会」を4月に設置いたしました。

この専門委員会は，北海道住宅リホームセンター理事としてもご活躍の中森さんをキャップに，足達先生，一宮さんにも入っていただき，住宅金融

木の家の外観

宮　島　さん

公庫札幌支所，住宅供給公社，建築指導センター，寒地建築研究所，道営林局，道林務部，それにマイホームセンター事務局，道木協の方々に委員をお願いし，これは現在も存続して活動しております。

司会　確かに親委員会をはじめ２つの専門委員会とも豪華で充実したメンバーで構成されておりますね。その親委員会の委員で，また落成式のテープカットをされたお１人でもあります宮島先生から委員会における基本構想，基本設計の協議を通してどのような感慨をお持ちかお聞かせ願います。

それなりの成果が出たのでは

宮島　木質材料需要拡大協議会はずうっとパンフレットを作ってきましたね。最初はカラマツでした。それから木質材料，それから断熱と，そういうことで３年間やってきた。そしてこれらのことを生かして，いま秦さんが言われたように，うまく，いいものをということで設計を実質の専門委員会にやってもらってきたわけです。

必ずしもそれは３年間の理想が実現出来たかどうかということは分からないけれども，非常に一生懸命やってくれたということで，それなりの成果が出たのではないかと思っています。皆さん本当に頑張っていましたからね。

司会　それでは一宮所長さんから設計専門委員会での討議の模様や設計の内容，特徴など，委員会の雰囲気も含めてお話いただきたいと思います。

船頭多くして…でも有意議な意見が

一宮　キャップが足達先生ですので直接先生からお話をいただくのが一番いいのでしょうが，あいにくお身体の具合を悪くされておりますので私が代わってお話することにいたします。

私は民間人ですので，偉い先生方と一緒にああいう会議をあまりやったことがありません。それで，船頭が少し多くて山に登っちゃうんじゃないか，という感じが実は一番最初にしたんです。それでも皆さんいろいろと意見を述べていただいて非常にうまくいったなあという点が多くありました。

一　宮　さん

ただ，最初から問題になりましたのは坪当たりの単価でした。大体40～45万円であればなんとかなりそうだったわけですが，やはりそれでは高すぎるという反論が皆さんからありました。最終的には高くなってしまいましたが，私自身もあんまり高い家は好きじゃあないんでもう少し安く仕上げたかったかなあという気はしております。

基本設計は足達先生が今迄の研究成果のすべてを結集したものがベースになった計画といえます。その１つが，あの通り庭を作るという，いってみれば外の空間を北国の場合は中に持ち込まなければいかんというので，玄関の真っすぐの所に通り庭みたいなものを作った。まあ土間ですね。

土間を作っていろいろな作業場兼ユーティリティにしたいというようなこと，それから子供室などは，小さい子供については声掛けができるような形にしたい，台所についても対面式にして子供だとか家族の方と話し合いながら家事をしたい，また，住宅というのは閉じられた空間ではなくてオープンな空間にしたい，という希望もあって，吹き抜けを作ったり，子供室を一体にしたり，そういったことが随分あのモデルハウスの中で特徴とされている点で，現在でも参観者の方々から感心されているところです。

その他にも，道産の材料として木ばかりでなく，道産のものであればブロックも，鉄板なんかも使いたいという希望もありました。なるべくならばそれに沿うようにしていくことにしたわけです。

断熱については壁150㎜以上，天井200㎜以上ということにしております。一部にはモデルハウ

スだから人が住むわけではないし，多少断熱なんかは手を抜いて木材を中心にまとめたらというご意見もありましたが，やはり，本当に住んでも大丈夫な家，断熱的にもしっかりした家を造ろうという希望が大半でした。まあそういう風にしたつもりです。

このようなことで設計の方はまとまったわけですが，専門委員会としては非常に熱心な討議というか，談論風発という感じで，まとめ役をやられた事務局の秦さんはえらいご苦労をなさったんではないかと思います。いずれにせよ，いろんな意見が出て大変有意議な会合であったと思います。

木の家の内部

興味ある設計内容，しかし課題もある

阿部　私の私的な感じで話をさせていただきますと，まず値段の問題がありました。昭和57年度の住宅金融公庫の建て坪当たりの単価をみてみますと，札幌市が43万７千円，旭川市39万５千円，函館市39万円，帯広市38万８千円，北見市37万２千円，主要都市の平均が39万２千円，郡部では30万７千円というものもあり，地域的に非常に違っておりますが，北海道全体の平均では主要都市の平均と同じ39万２千円となっております。

そういった点で，この委員会では試験的な意味合いを強く出すのか，あるいはより実需に直結させる実務的なものを目指すのか，その辺が若干あいまいではなかったろうか。

今回のモデルハウスは，土間空間を設けたり，吹き抜けですとか，大変進歩的といいますか，興味深い設計内容になっております。ただ，残念なのは歩掛かりがかなり増したということです。

断熱とかそういう機能性を合わせまして、工法上の省力化，その辺のツメがちょっと時間的に余裕がなかったということもありましょうが，今後の課題ではないかと思います。

それから，私は北海道の経験が浅いものですからどうしても本州の感覚で北海道の家というものを見てきました。そういう点で，例えば木というものは割合いファッション性を豊かに造形出来る素材ではないかという感じを持っていたのですが，機能性の方を重視されまして，ああいう非常にシンプルなものになった。本州は軸組みですから柱の美しさというものが家の美を構成していると思うんです。北海道の方は壁組みか大壁工法ですから，そういった点でも，新しい工法，柱が良いかどうかはあろうかと思いますが，もう少し突っ込んだ，木の使わせ方といいますか，木の使い方といいますか，そのあたりの工夫があったらまた別なものが出来たのではなかっただろうか，という感じを持っております。

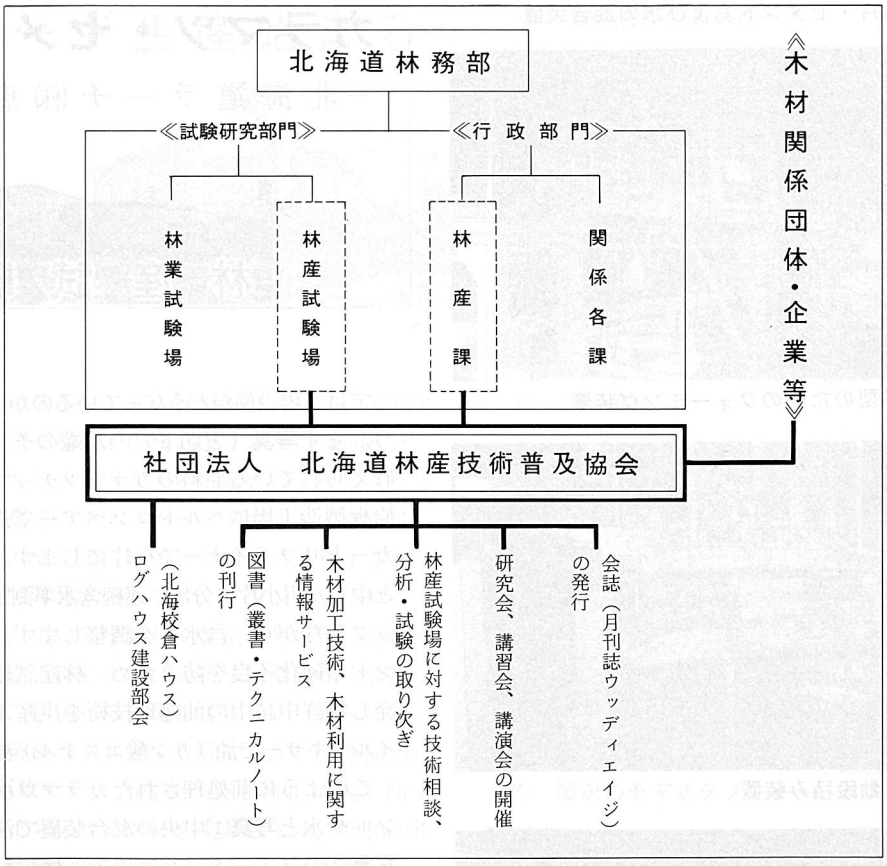
司会　ただ今の阿部企画課長さんのお話は，61年以降も道内の主要な地域に建設していきたいという計画もあるようにお聞きしておりますので，今後の参考になる貴重なご意見かと存じます。

—以下次号—

木材の新時代をおとどけする
『社団法人　北海道林産技術普及協会』のごあんない

（社）北海道林産技術普及協会は北海道立林産試験場の研究成果を広く木材業界に普及する目的で昭和28年に設立されました。

以来30有余年、林産試験場や関係行政機関の強力なバックアップとご指導をいただきながら民間企業のかけ橋として木材工業の技術力向上、新しい技術の普及および人材養成など木材産業全般にわたる振興のために幅広い活動をつづけております。



当協会は会員の会費によって運営されております。

特別会員 ― 北海道木材協会、北海道森林組合連合会などの全道および地方の木材関係団体や有力企業等。

通常会員 ― 林産協同組合、森林組合などの単位組合や自治体、企業および個人。

事務所　〈〒070 旭川市緑町12丁目
北海道立林産試験場内〉
電話(0166)51―1171番(内線51)